

今年度decに新しい仲間が加わりました! 今後の抱負と共にご紹介いたします。どうぞよろしくお願いたします。

調査研究部 調査第2部 研究員 鈴木 希歩



【すずき のあ】 2003年、苫小牧市生まれ。2026年、北海道商科大学商学部観光産業学科卒業。趣味は野球観戦とシルバニアファミリーを集めること。学生時代、中国に留学した経験があるので、いつか業務で活かせるよう頑張ります。

大学では観光学やまちづくりを学び、地域の人と関わりながら課題解決へ向かうゼミナールに参加しており、興味を持つようになりました。そんな中、地域の魅力発信や連携によって地域活性化を目指すシーニックバイウェイ北海道に出会い入社を決めました。入社してから2ヶ月が経ち、出張も多く、慣れないこともありますが、様々な場所を訪れ、人と出会うことができ、新しい発見ばかり。楽しく充実した日々を過ごしています。



中国広州市へ。日本とは違うデジタルの発展に驚きました



飾っているお人形の一部です! (シルバニアのまちを作るのが目標!)



dec monthly

2026.6.1 vol.489 デックマンスリー



- Monthly Topic (マンズリートピック)
D-RED地域イノベーションシンポジウム社会を変えるデジタル技術～北海道から広がる未来への可能性
- dec Report (デックレポート)
令和8年度 dec定時総会



dec Interview >>> 北海道大学大学院工学研究院、公共政策学連携研究部 教授 長井 宏平 氏

老朽化する橋や道路、高齢化、過疎化する地方。インフラ維持管理が国の喫緊の課題になっているなか、コンクリート工学を出発点に、多様な社会データを駆使したデータ分析を通じて地域に寄り添ったインフラ維持管理のあり方を研究、提起されているのが長井宏平さんです。北海道大学の研究室をお訪ねしました。

新潟県長岡市から北海道大学に進学され、その後、博士号取得まで9年間、北大キャンパスで過ごされた後、東京大学へ赴任。そして2023年、北大工学研究院教授として戻ってこられました。

小学校6年生のときに埼玉県から新潟県長岡市に移りました。父(長井正嗣氏:長岡科学技術大学名誉教授)が東京の重工業メーカー勤務から長岡科学技術大学の教員に赴任したため、父は橋梁の設計や建設、研究に従事してきた土木工学者です。会社勤務時代には石狩市の花畔大橋の設計にも関わったと聞いており、私も一度、橋を見に連れて行ってもらったのですが、子どもだったので、よく覚えていません(笑)。

私が土木工学を専攻したのは、たぶん父の仕事の影響もあったと思いますが、「土木はいいな」という思いはずっと抱いていて、迷いなく進路を決めました。北大を選んだのは、北海道に強い魅力

を感じて憧れていたから。他大学は考えていませんでした。

北大では上田多門先生のコンクリート工学の研究室に所属し、博士課程修了後は日本学術振興会海外特別研究員で2年間、スイス連邦工科大学チューリッヒ校で研究しました。

2007年、東大出身の上田先生のつながりもあり、東大大学院工学系研究科の社会基盤学専攻の助教に着任し、11年からは東大生産技術研究所の准教授を務めました。この間、主に鉄筋コンクリートについて研究し、研究室では耐久性をテーマに数値解析のシミュレーションのための基礎実験やモデリングなどを行い、劣化現象の構造分析にどう応用するかというような課題に取り組んでいました。

このような基礎的なコンクリート研究の一方で、東大赴任間もなくから問題意識を深めたのが「少子高齢化社会×インフラ維持管理」という課題です。

現在も精力的に取り組んでおられる課題です。着手されるきっかけについてお聞かせください。

東大の助教時代に、若手研究者育成を支援する文科省の「グローバルCOEプログラム」で東大のテーマ(「都市空間の持続的再生学の展開」)が採択され、藤野陽三先生がリーダーを務めるチームの一員になりました。このプロジェクトは

インフラの価値を測るには、そこで暮らす人の幸せにどうかかわるかの視点が不可欠。社会データを活用したデータ分析によって、インフラ維持管理の方向性が見えてきます。

dec Interview

ながい こうへい
1977年生まれ。新潟県出身。北海道大学工学部土木工学科でコンクリート工学を専攻し、2005年北大大学院工学研究科博士課程(社会基盤工学専攻)修了。スイス連邦工科大学チューリッヒ校日本学術振興会海外特別研究員を務めた後、07年東京大学大学院工学系研究科(社会基盤学専攻)助教、08年同研究科特任講師、11年東京大学生産技術研究所准教授を経て23年北大工学研究院教授に。24年から北大公共政策学連携研究部教授を兼任。専門はコンクリート工学、維持管理工学。趣味は「全然ないです、時間がなくて(笑)」。

(一社)地域社会資本マネジメント研究所 (RIM-Lab) が本格始動!

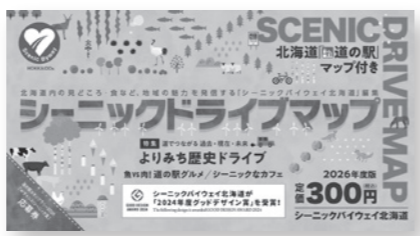
(一社)地域社会資本マネジメント研究所(RIM-Lab)は、2026年4月21日に設立総会を開催し、正式に発足しました。理事長には北海道大学名誉教授の高野伸栄氏が就任しています。このたび(一社)北海道開発技術センター内に事務所を設置し、本格的に活動を開始しました。建設産業の人材確保・育成や生産性向上、建設マネジメントに関する調査研究を進めてまいります。お近くにお越しの際は、お気軽にお立ち寄りください。



- ★住所: 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17号セントラル札幌北ビル4F
- ★電話: 011-738-3361 [(一社)北海道開発技術センター] ★e-mail: info@rimlab

「シーニックドライブマップ2026年度版」発売中! 定価250円(税込)

ドライブマップ2026が発売になりました! 今回の特集は、「道でつながる 過去・現在・未来【よしみち歴史ドライブ】」。その他、「魚 vs 肉!道の駅グルメ」、地元ならではの「シーニックなカフェ」をご紹介します。「道の駅」マップがついたシーニックドライブマップ2026年度版は、全道の道の駅等でお求めください!



🏠 「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!

編集後記 先日(6月6日)に函館で開催された「はこだて花かいどう」。今年で23回目を迎えました。私自身、参加するのとても楽しみにしている活動です。国道5号の沿線にお花を植えたあとは、みなさんに出来立ての焼きそばを振る舞うのですが、その数880食! その数を見ても、地域に根付いた活動なんだなあ、と改めて感じます。そんな大量の焼きそばを作ってくださっているのは函館開発建設部の若手みなさん。そして、町会のお母さんとともに私たちは焼きそばを流れ作業でバック詰めして、みなさんをお迎えしています。最近は札幌や道外からも足を運んでくださる方もいて、ますます盛り上がっています! (R.W)



手際よく大量の焼きそばを作る函館開発建設部のみなさん(上)と焼きそばをバック詰めする町会のお母さん(下)

都市工学、建築学、社会基盤学の3領域の若手研究者が合流して、既存の分野の枠組みにこだわることなく自由にフィールドワークなどを行ってテーマを追究するというものでした。

私たちが実践したのは海外のインフラ視察のほか、国内では「限界集落」と呼ばれる過疎地域に入り、その暮らしぶりや移動の実態、インフラの状況などを調査し、地域の将来像について議論することでした。対象としたのは高知県吾川郡仁淀川町で、四国山地の山間に点在する小さな集落には少数の高齢者が暮らしていました。ある集落では「集落最後の住民」というおばあさんに話を聞くなど現地の高齢者のインタビューを重ねるなかで少子高齢化社会の現状を実感的に受け止めることができました。また、異分野の先端的な研究者たちと体験を共有しながら議論することで、分野による地域の捉え方や研究手法の違いを認識したり、世の中を動かしていく先端研究の潮流に触れるなど視野は大きく広がりました。



過疎地域の暮らしぶりや移動の実態、インフラの状況などを調査した高知県仁淀川町長者地区

このような高知の体験を機に「地域における道路や橋の価値はどのように評価したらいいのか」というテーマに深い関心を持つようになりました。毛細血管のように地域を走る細かな市町村道の場合、道路も橋も単純な経済的価値では測り得ません。そこで暮らす住民の幸せを支えるさまざまな社会的評価軸で測るべきではないか。つまり、ある橋が必要かどうか、また、その維持管理がどの程度大切なのか、を判断するためには社会学的な側面に踏み

込んで検討する必要があると考え、高知県を皮切りに模索を始めました。

その後、自治体のインフラ維持管理を支援するためのデータ分析の研究を展開されてこられました。

初めて本格的なデータ分析を手掛けたのは10年ほど前の新潟市の維持管理計画を改訂するプロジェクトでした。当時はインフラに関する公開データはほとんどなかった時代で、新潟県が持っている市町村の橋梁点検データ約1万橋分について地元コンサルタントと連携して傾向を分析し、劣化予測プログラムを作成。市の維持管理計画に役立ててもらうことができました。

実は、このようなインフラのデータ分析の研究がしやすくなったのはここ5年ほどのことです。大きいのは2022年に国交省が全国の全橋梁約72万橋の基本データを公開したことで、このころから各種のビッグデータがオープンになって、さまざまな要素を盛り込んだデータセットを整えることが容易になりました。PCの性能向上やAIの高度化などで、学生でも大量データの分析に取り組むやすくなっています。

折しも国交省は人口減少やインフラ老朽化に伴う橋梁統廃合を推進しており、管理者である自治体は橋の要不要を判断することが求められています。その判断材料の提供は大学の重要な役割と考え、開発したのが「オープンデータを用いた

統廃合検討橋梁のスクリーニング手法」^{*}のウェブアプリでした。

このアプリで北海道については市町村管理の約2万橋を地図上にプロットしており、各橋梁の周辺環境を示すパラメータとして2020～70年の人口推移、学校や医療機関などの位置、物流路線やバス路線などのデータが統合されています。さらに橋が使えない場合の迂回路ルートについても別途、開発した「迂回路設定プログラム」の計算結果を加えました。

「迂回路設定プログラム」は私が長岡工業高等専門学校との研究室と連携して開発したもので、当初、新潟県内市町村の橋梁について実施した後、全国70万橋について国交省の橋梁データとオープンストリートマップを使って計算し、ソフトウェアの開発プラットフォームGitHubで公開しています。橋梁統廃合などインフラ維持管理についてだけでなく、災害時にも役立つ情報で、自治体職員の方々には活用していただけたらと思っています。

研究室では、北海道のインフラ維持管理に関してどのような課題や対策に向けた知見が明らかになっているのでしょうか。

近年の卒業論文の取り組みから例を挙げると、北海道の将来予測として他都府県と比較して居住面積の減少が著しいことが指摘できます。2020年に対する2050年の比率で人口と居住面積(人口が1人以上存在する土地面積)を分析すると、秋田県が約40%の人口減、居住面積約10%減に対して北海道はいずれも25%減で居住面積の減少率は全国一です。

道内の市町村管理の橋梁は2020年で約2万橋で、すでに20年時点で周辺人口ゼロの橋が3千橋近くあり、50年には5千橋以上に増えると予測されます。このような使われなくなった多くのインフラをどうするのかは、特に北海道にとって大きな課題です。研究室では道路や橋などの人工構造物をどう自然に戻していけばよいか、という方策についても研究を進めようとしています。

別の卒論では、橋梁点検データと社会データを活用して道内179市町村の橋梁維持管理にかかわる特性を分析し、傾向が似ている市町村をグループ分けするクラスタリング分析を行っています。人口動向や自然環境、財政力指数など自治体の状況、医療機関や商店の数など住民の利便性に関する社会データを入れて分析し、橋梁の劣化に最も影響を与えている要因を明らか



迂回路計算結果の可視化(出所:新地捺未、福澤健人、長井宏平「社会データと橋梁データを用いた北海道市町村の維持管理特性クラスタリング」AI・データサイエンス論文集6巻2号,2025)

にするとともに、傾向の似た市町村をグループ化することでインフラ維持管理の方策を連携して検討したり、国や北海道、研究機関が市町村を支援しやすくなるなどの効果が期待されます。

内閣府の「戦略的イノベーション創造プログラム」(SIP)の第3期ではプロジェクトマネージャーを担当され、国交省の「地域インフラ群再生マネジメント」(群マネ)では検討会委員を務められるなど国のプロジェクトについても貢献されてきました。

SIP第3期(2023～27年度)の14課題の一つは「スマートインフラマネジメントシステムの構築」で、(国研)土木研究所が推進法人となっており、産官学連携により多数の機関、メンバーが社会実装を見据えた取り組みを進めています。

この課題には5つほどサブ課題があり、私はそのうちの「地方自治体等のヒューマンリソースの戦略的活用」と「EBPM(客観的根拠に基づく政策立案)による地域インフラ群マネジメント構築に関する技術」という自治体関連のプロジェクトの推進役を担っています。

ステージゲートの審査を経て現在、

3つのプロジェクトチームが総仕上げの段階に入っており、その一つ、金沢工業大学など北陸チームが取り組むのは地域で役立つ維持管理技術の開発と実装で、専門性のない職員にもわかりやすい教育コンテンツの充実や現場で役立つ維持管理手引きの開発による人材育成が取り組まれています。

一方、国交省の「群マネ」は複数自治体のインフラや複数分野のインフラを「群」として束ねて対応することで効率的、効果的にマネジメントする取り組みですが、23年に11のモデル地域が選定されて試行が始まっています。私はモデル地域の取り組みについて助言、推進する検討会などの委員を務めています。

SIPや群マネを通じて国の担当者の方々や接する機会も多く、そのご苦労も伝わってくるのですが、各地の自治体の実態を見守り、分析してきた立場としては、インフラ維持管理の手法の刷新が求められる時期に来ているのではないかと感じています。

現行の長寿命化修繕計画は2012年の筷子トンネル事故を機に導入され、これにより自治体には5年に1度の橋梁点検が義務化されて2巡したところですが、点検データの分析の質にばらつきが大きく、将来予測の精度が高くはないなど、その効果に懸念を感じる部

分があります。今後はデータ活用の手法をリニューアルしたり、群マネのような手法で効率化を図る必要があるのではないかと考えています。

北大に戻られて3年が経ちました。今、北海道に対する思いは。

北大進学を決めるときに感じていた北海道の魅力の大きさは今も変わっていません。研究者としても北海道ほど日本の地域社会の将来を見通す上で興味深いフィールドはない、と醍醐味を感じているところで、行政機関の方々をはじめ

研究を通じたつながりにも恵まれて、みなさんに大変よくしていただけて幸せですね。

現在の自分の仕事は3つあります。一つは鉄筋コンクリートに関する劣化など構造力学的な研究、二つめは地方自治体のインフラ維持管理をどう良くしていけるかという課題。三つめはインフラ維持管理技術の海外展開です。日本の地方自治体と途上国はお金や人材、技術力の不足という点で非常に親和性が高い。国内の取り組みや成果を海外でうまく活用し、展開させていくことができればと思っています。

海外プロジェクトには以前から東南アジアなどについて頻繁にかかわってきましたが、SIP第1期(2014～18年)の共同研究に参加した際にはインフラ維持管理技術の海外展開について担当しました。17年にはSIPとJICAの協定を通じて「道路マネジメントアセットプラットフォーム」が実現し、途上国に対する道路維持管理に関する技術協力や留学生受け入れについて国内の有識者が連携して支援する取り組みが始まりました。このような制度づくりに携われたことは嬉しいことでした。

今後は「鉄筋コンクリート」「地方」「海外」という3つの分野の取り組みを循環させて、成果を一体的に高めていくことができればと思っています。

^{*}現在、10道県の試行版が閲覧可能。 <https://rsc.dxiui.com/> IDとパスワードとともにtest

社会を変えるデジタル技術 北海道から広がる未来への可能性

D-RED地域イノベーションシンポジウム

インフラ管理のイノベーションを目指して国交省北海道開発局と北海道大学が連携協定を締結したのは2022年。同年、北大ではD-RED(データ駆動型融合研究創発拠点:Data-Driven Interdisciplinary Research Emergence Department)が設立され、共同研究などで北海道開発局との連携が強化されてきました。その成果報告を目的に開催された標記シンポジウムは、北海道開発局の遠藤達哉局長の開会挨拶に続いてD-REDの長谷山美紀拠点長がD-REDの概要を紹介。その後「インフラDX」と「デジタル人材養成」に関する2つの講演が行われました。

2026年3月11日 北海道大学学術交流会館
【主催】D-RED、北海道開発局、dec
オンライン同時配信



開会あいさつ



会場の様子

詳細はコチラ



D-RED



DREP

北海道から社会を変える～D-REDの取組紹介

長谷山 美紀氏
[北海道大学D-RED拠点長、北海道大学大学院情報科学研究院教授]

D-REDは「データ駆動型サイエンス」と「多様な研究分野」を組み合わせた先端融合研究を推進し、新たな形の産官学連携によって研究の実証と社会実装の加速を目指す全国初のDX先端拠点です。現在、主に土木工学、医学、材料科学の分野での取り組みを進めており、土木工学分野では北海道開発局様との連携協定に基づいてAI自動診断による次世代インフラ管理システムの共同研究を進めてきました。これは喫緊の課題である道内の国道に設置された道路標識や矢羽根など約24万基の管理省力化を目指すもので、ドローンとAIによる技術の実装に向け



果を上げつつあり、さらにインフラ点検の諸課題解決に取り組みを前進させています。北海道開発局様には特任教授として人員を送り込んでいただくなど連携は深まり、感謝に堪えません。今後も地域課題解決に取り組み、世界一の先端研究拠点へと邁進します。

講演
01

北海道から加速するインフラDX ～AIによる道路附属物点検の高度化～

前田 圭介氏 [北海道大学大学院情報科学研究院准教授]

手軽さと利便さにより驚異的スピードで成長、普及している生成AI。このようなAI発展期において国交省は2022年、道路データプラットフォーム「xROAD(クロスロード)」を公開し、インフラDX推進のためのAI応用の基盤整備を始動しました。同年、本学は北海道開発局様との「道路附属物点検の高度化」の共同研究を開始。その目的は道内の国道に設置された矢羽根や標識など、通常、高所作業車による点検を要する道路附属物についてドローンとAI活用で作業の効率化を図ることです。

研究は22～25年度まで4段階(以下①～④)で取り組みました。①腐食の有無や変形・欠損など損傷の「種

類」の分類、判別についてImage Netというデータセットを援用してAIを構築。腐食の有無について96%の分類精度を達成。②損傷の分類結果の信頼性向上のためにAIの判断時の注目領域を可視化する技術を構築し、信頼性向上を確認。③損傷の「程度」分類に向けて生成AIを導入。「文脈内学習」に着目し、画像と判定結果をペアで与えて関係性を疑似的に学習する手法により3段階の「程度」分類は72%の精度に到達。診断所見の文章生成でさらに業務効率化を推進。④自律飛行AIドローンの開発ではドローン映像からのデータ取得と腐食検出精度は確保。しかし風や附属物の個体差など現場に合わせ



リアルタイムでドローンを軌道修正する制御機構は一定の調整ができたものの課題は残されています。26年度以降は生成AIのさらなる活用と自律飛行AIドローンの高度化、ドローン映像に対するAIのチューニングに取り組む予定です。

インフラDXの加速にはAIの改良、新技術に合わせた制度設計、人材育成、を三位一体、同時に進める必要があると考えます。

講演
02

社会を変える地域デジタル人材の底上げ～北海道大学デジタルリスティングプログラム(DREP)の開発と運用

近藤 勝俊氏 [北海道大学総合イノベーション創発機構
データ駆動型融合研究創発拠点特任教授]

DREP(北海道大学デジタルリスティングプログラム)は内閣府の「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」に採択された北大の取り組みで、私は2024年4月、北海道開発局からの出向でD-RED特任教授に着任し、その開発運用に携わってきました。DREPは①デジタルスキルレベルの底上げ、②デジタル中核人材の育成、の2階建て構造の研修プログラム。①は入門編からAI演習の4コース(オンライン・オンデマンド)、②は実践的グループワークで課題解決型の演習を行う地域課題コースで構成されています。情報を体系的に学ぶ機

会のなかった中高年世代の知識習得を支援し、学校教育で情報を学びDXの即戦力となる若者世代との有機的連携を促進して組織のDX推進に寄与することがDREPの狙いです。

DREPは23～27年度の事業で、内容の改修を重ねて25年10月からはPhase3として運用しています。現在、受講の協定締結機関は189団体、登録者数9,243名(26年2月末時点)。業種は建設インフラ系が多いものの多様で、道外の機関も14%を占め、受講者は全国37都道府県に及んでいます。

Phase3はPhase2の受講者アンケートをもとに改修し、カリキュラム



再編やユーザーインターフェースのアップデート(ブラウザ形式への移行など)を行いました。その結果、満足度は約9割と上がり、受講しやすいと高評価を得ています。今後はPhase4に向けてさらなる運用改修を行うとともに、システムの可用性の改善やポータルサイトのリニューアルなどでプロモーション強化を図っていきます。

文責:dec

令和8年度 dec定時総会

令和8年度dec定時総会が5月29日、京王プラザホテル札幌において開催され、予定の4議案が滞りなく承認されました。令和7年度の事業報告の概要を一部抜粋してお届けします。

令和7年度の事業報告の詳細については、decホームページ(<http://www.decnet.or.jp/>)をご覧ください。

調査研究事業

各自主研究の成果概要は、decホームページをご覧ください→



雪氷障害に備えた安全な社会基盤に関する研究

気候変動等の影響により極端化する積雪寒冷地特有の雪氷障害についての調査を行い、画像処理やAI、ビッグデータの分析や解析を用いて、地域や社会基盤を守るための研究、提案を行った。



Webカメラによる吹き払い柵区間の観測

地域コミュニティを通じた地域振興及び観光まちづくりに関する調査研究

地域協働による各種調査・取組を通じて、地域資源の付加価値化や新たな地域コミュニティの創出及び産学官連携推進を目的として、観光・地域づくりに関する調査研究を行った。具体的には、道路沿道の景観保全や環境保全及びその活用に関する調査研究を地域活動団体の支援も含めて実施した。



大学等との共同研究によるシーニックバイウェイの推進に向けた検討(現地確認)

モビリティ・マネジメントや新技術を活用した公共交通の維持・発展に関する調査研究

今後の公共交通の維持・発展を目的とし、モビリティ・マネジメントやMaaS、CASE時代に対応した道路整備、交通結節点(バスタ)等のあり方について、調査・研究を実施した。なお、各種研究成果については、「土木学会」、「日本モビリティ・マネジメント会議」、「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム」や「日本地域学会」等で報告した。



日本モビリティ・マネジメント会議(ポスター発表)

北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究

世界水準の観光地形成を目指して、北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究を行った。具体的には、こ



知床半島一周サイクリング2025(開催支援) 来まで調査研究を続けてきた「北海道エコ・モビリティ」、「都市型サイクリング」、「アドベンチャートラベル」を踏襲し、北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムを担う人材の育成、受入環境の整備、ツーリズム商品の造成などについて調査・検討を行った。

ほっかいどう学の推進に関する調査研究

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムと連携し、北海道総合開発計画に

おける「ほっかいどう学」の推進や、学校教育を通じた社会的ジレンマ問題の解消を図った。また、北海道の土木史や道路史に係る調査研究を実施した。なお、各種研究成果については、「(公社)土木学会主催の「土木と学校教育フォーラム」や、「土木史研究発表会」に参加・発表するとともに、併せて情報交換・事例収集等を実施した。



全道みち学習交流会

野生生物との共生に関する調査研究

国道等で発生する動物との衝突事故等の被害対策検討に必要な調査研究、調査手法や対策手法の検討を行った。国内外の学会等での発表、参加により情報収集を行った。



野生生物フィールドサイン勉強会

北海道の地域防災に関する調査研究

北海道における地域防災力の向上に向けて、関係機関・団体と連携しつつ、地域防災力向上方策等について検討した。また、道内外で開催された学会や研修会に参加し、教材研究及び全国防災関係者との情報交換を行った。



第11回 避難所・避難生活学会年次集会への参加

将来の北海道開発に関する調査研究

北海道総合開発計画のフォローアップや次期総合開発計画に資するための調査研究を行った。



持続可能な運用に向けた流雪溝の最前線の開催

- (1)「2025年度 [dec monthly] でのインタビュー
- (2)道路事業と住民参加に関する研究会の開催
- (3)「文化とインフラ」に関する勉強会の開催

吹雪対策施設(吹き払い柵)の設置環境による吹き払い機能の解明と防雪能力の定量評価

吹き払い柵について、現地の実態調査を踏まえて、風洞実験およびシミュレーションでの再現結果を分析した。



風洞実験の結果例

会員数(令和8年3月31日現在) 法人会員:216社 個人会員:68名

情報収集・連携事業

寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理

国内外の会議やシンポジウム及び各種研究機関等との交流を通じて、寒地技術や交通政策・地域政策に関する技術情報を収集、整理した。

技術資料等のデータベース化

業務関連資料のデータベース化、成果品等のデジタル化を図り、管理システムを構築した。

「寒地開発技術委員会」の開催と運営

寒地開発技術の開発動向や方向性の検討を行うとともに、道路事業に関わる設計基準等の検討を行った。

インターンシップ制度

2025年9月8日~14日の7日間、インターンシップを実施し、筑波大学3年生2名を受け入れた。

沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業

シーニックバイウェイ北海道の参加団体を対象に、活動団体が実施する沿道の環境を守り、活用する事業に関する共同研究事業を継続。特に、参加団体の連携事業に重点をおいて研究を実施するほか、活動団体の研修派遣事業も同時に実施した。また、webやドライブ情報紙を活用した地域情報の提供も継続して行った。



日本モビリティ・マネジメント会議



デジタル化した写真素材(1997年度 国道38号)



インターンシップの様子 (JCOMM:聴講・運営スタッフとして参加)



情報誌「Scenic Byway vol.36」



dec monthly(デックマンズリー)

広報・国際交流事業

広報・出版刊行等

- ニュースレター(dec monthly)の発行年12回
- Webサイトの運営(<http://www.decnet.or.jp/>)

出版刊行

- 寒地技術論文・報告概要集2025の編集・発行
- 第25回「野生生物と交通」シンポジウム講演論文集の編集・発行
- 「平成の北海道道路史」編集委員会の開催

シンポジウム・セミナー

- 第41回寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
- 第25回「野生生物と交通」シンポジウム(開催地:札幌市 オンライン同時配信)
- 地域政策研究セミナー等
- SBW20周年記念事業(シーニックバイウェイ北海道20周年記念フォーラム)



↑第41回 寒地技術シンポジウム →第25回「野生生物と交通」シンポジウム



国際交流

- 米国シーニックバイウェイ関係機関との交流
- PIARC(世界道路協会)第17回冬期サービスと道路のレジリエンスに関する道路会議への参加
- 第20回日中冬期道路交通ワークショップ(於:黒竜江省)への参加
- ATA(アドベンチャートラベル・トレード協会)との交流
- ISCORD(寒地開発に関する国際シンポジウム)の準備



←シーニックバイウェイ北海道20周年記念フォーラム



第20回日中冬期道路交通ワークショップ

開発事業等に関する調査研究の受託...計77件